

天明朝の「ボランテア」運動

林 英 夫

手もとに刊記を欠く「御冥加普請之記并図」（タテ二七・五センチ・ヨコ一九・五センチ・題箋・内題とも同名）とある全十五丁、内図八葉の和本がある。序文に「寛政四年壬子夏四月 一東利助実雄」とある。「国書総目録」には、この序文の寛政四年を刊年とし、さらに、「天明三年尾張枇杷島水災記」と題する別称本のあったことを記している。また、この本とは別に「国書総目録」に「御冥加自普請御称詞之記」があり、これは小出大助の著天明四年頃の刊とされ、さらに別称「尾張領大野木堤普請天明三年」とある。

この二種の本は、いずれも名古屋北部と春日井郡の間を流れる庄内川の大野木村にかかる堤防築留自普請一件を記したものであることはまちがいない。

拙蔵本「御冥加普請之記并図」は「昭和二十一年十二月一日 名古屋藤園堂にて二十五円」とある私の紙片をはさんでいる。つまり戦後、戦地から戻って間もなく当時名古屋清水町にあった藤園堂（伊藤為之

天明期のボランティア運動（林）

助氏）を訪ねて求めたものである。

当時天明のころ「自普請」を「御冥加普請」と称し、（中略）一種の流行の如くなるに至り、終には御冥加を称して工役を強ふるに至りしかば、上書して矯めんとするものすらあるに至れり」（『名古屋市政政治編』）とある。つまり一種の上層農による世直し運動のようなものが、尾張藩主宗睦のいわゆる天明の改革によって起ったのである。ところで拙蔵本の最後尾十五ウの全頁に田中道麻呂の六百字余の文と歌一首を付している。この本の全文を引用したらしい「名古屋市政政治編」（五二九頁）には、この道麻呂の全文を欠いている。市史の依拠した刊本にはなかったのかも知れないが、この一文は一東利助なる押切村の庄屋で、この本の著者なる人を知る手がかりを得るうえに重要である。道麻呂（一七八四年没・六一歳）は本居宣長の門人で、盛時、名古屋で道麻呂の門人三百余人に及んだという。利助も道麻呂門の一人であった。道麻呂の文は自普請（冥加普請）を発企した一東利助への讃詞で「君（藩主）と民とうるはしかるためしは、近き世にきくも及ばねば、後の世にしも伝へまゝ、はり（彫）してうつし絵にせる心を聊其はしに書つけ侍になんある」とし、さらに歌一首「おほけなく君がめぐみのむくひわがする大君のめぐみしるべき我ならなくに」を付している。

ところで、この天明の冥加普請について記しておかなくてはならない。

天明三年秋大雨があつて名古屋城の北方を流れる庄内川が氾濫し、大野木村（名古屋市西区）の堤防穴壊の危機が迫り「今はかくよと見えたる所に、いづくともなく俄に瑞風吹來りて雲霧を払ひ、忽晴天とな

り白日昭々として輝き」(「御冥加普請之記并図」、以下「」内引用同書)という祥瑞現象が起き、これは「明君(藩主宗睦)熱田大神宮へ晴雨を祈誓し給ひける」の「御神徳」によるものとし、これを「御冥加」として天明三年十二月四日を鍬初めと定め「其所の印を付たる幟をたて、此日集る所の人数三千人自普請の事成れば町の者はけやりをうたひ、在の者は長持歌をうたひ、川を凌らへ土砂を運び数百の幟、風にひるがへり、其声遠村迄響き渡り目ざましかりける有さまなり」とある。いわゆる「ボランテア」活動であるが、この二千余人は遠近の村々の庄屋たちが、「何々村」と記した幟を立て参集した数である。引連れてきた者たちが、日当や酒肴をふるまって土木工事に参加、現場には家老・代官たちが立ちより酒肴・菓子などのほか、「御冥加に寄集りたる庶民に奇特の旨仰給ひ赤飯長持十二棹を下し給ふ」という状況で、藩主も「御鷹野」のついでとして「御覧遊ばされ奇特の旨」にて「御酒四斗入十五樽、御菓子数一万」を下されたとある。

それより一年余り前、同じ尾張国中島郡起村(尾西市)の加藤磯足は天明二年九月、五十余か村の動員助力を得て木曽川の堤防修築作業を発企したが、この磯足も一東利助と同じように田中道麻呂門から道麻呂の死とともに宣長門に名を列ねた草莽の国学者であった。さらに磯足は、細井平洲を自村に招請して教化「講談会」を催し、三回にわたって合せて万余の聴衆を集めたが、それ以前、尾張海東郡木田村(津島市)の大館高門も平洲に自村での「講談」を招請しているが、彼も宣長門の草莽の国学者であった。天明という時期、濃尾の平野地帯に商品作物や綿織物生産の農村への広汎な展開がみられた。これにともなう

天明期のボランティア運動（林）

小商品生産者層の成長と商品貨幣経済の展開は、農村に深刻な危機意識をもたらした。ことに上層農は、下層からの突きあげによる村方出入りの攻囲の対象とされ、上層農による村共同体支配の混乱が自覚的に認識し得る段階にあったことが知られる。こうした時、藩政側に協調することによって対応しようとする上層農の広汎な動きがあり、ある程度、一時的ではあるが、治農効果をあげたことが知られる。

これを道德教化の面から平洲の「講談」を聞かせ、「冥加普請」運動によって対応しようとしたところに当代の国学の限界があったが、国学の政治思想を理念としてとらえた多くの草莽の知識人たちの苦悩の背景を知ることでもきよう。

（なお、「ボランティア」という用語はこの江戸時代に使用することは適切ではないが、良い言葉が浮かばないまま」とした。）

（九五・七・二三）（立教大学名誉教授）